様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月　３１日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：19530753
研究課題名（和文）地域社会の変容下における定時制高等学校の危機と対応過程

研究課題名（英文）Crisis and Progress of Part-time High Schools at a Time of Transformation in Local Communities

研究代表者
柿内　真紀（KAKIUCHI MAKI）
鳥取大学・生涯教育総合センター・准教授
研究者番号：70324994

研究成果の概要（和文）：聞き取り調査（6都府県25校の定時制高校，教育委員会），学校基本調査（1948年～2007年）等を基に，定時制高校を都市・地方，伝統・改革の２軸で類型化し，類型ごとに生徒層が異なる仮説を示した。加えて，３地方都市の定・通・全日制における教員・生徒対象質問紙調査から，定時制高校の分化の展開が地方と都市では異なることと生徒類型を提示した。また，全国の定時制高校悉皆調査を実施した。単純集計報告を作成後，定時制高校の役割と課題を考察中である。

研究成果の概要（英文）：We have three outcomes as follows. First, with based on the interviews at twenty-five part-time high schools and several boards of education in six prefectures, reviews, and analysis of School Basic Surveys (1948-2007), we tried to categorise schools into four types. And we drew a hypothesis that every type consisted of different student groups. Secondly, we conducted the questionnaire survey of teachers' and students' perception at part-time, correspondence, and full-time high schools in selected three cities in rural and small urban areas. From the result we found that the differentiation of part-time high schools developed in a different way in comparison with large urban cities. Thirdly, we also did the whole survey of part-time high schools in Japan by questionnaire and grasped the situation. After that, we continue researching on the current role and issue of them.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：比較教育，教育政策
科研費の分科・細目：教育学・教育社会学
キーワード：教育学，社会学，定時制高校，生徒文化，教員文化，通信制高校，周縁化

１．研究開始当初の背景

定時制高校進学者の比率は，全体から見れば極めて小さい状況である。しかし，その質においては就労者のいっそうの減少傾向とともに，不登校経験者，全日制高校中途退学者，多様な原因による適応遅滞者等，新たな質を持った生徒達が増加してきたことによって，大きな変容を迫られてきた。と共に，学校の維持・存続をはかるために学校自身が多様な生徒の進学を是認あるいは積極的に受け入れてきた事例も多い。こうして本研究の背景の第１として，主として1990年代以降の定時制高校の質的変容を明らかにする課題がまずあげられた。

第２には，後期中等教育全体の中での定時制高校の位置づけをめぐる問題である。今日において，定時制高校進学という選択肢を選ぶか，選ばないかという問題は，すでに一度は学校教育から周辺へ追いやられた自己を，高校卒業という資格をバネに再び中心に押し返すか，あるいはさらに周辺の位置に留まるのか(周縁化)という厳しい選択の中にある。

これまでの研究の中では，高校の序列・格差に関する研究は多く行われてきた。そうした高校の格差・序列は，学力序列による振り分けになっており，しかもその背後に生徒の家族の階層格差が入り込んでいることについては，繰り返し調査研究が行われてきた。しかし，そうした研究の中で定時制高校の位置づけはあまり論究されることがなかったのである。その点を今回の研究を通して明らかにすることを試みることとした。

第３は，高校改革下で定時制高校が置かれている状況である。定時制高校は1990年代半ば以降に進行してきた，全国の高等学校再編計画の下で，多くの場合その最終段階における再編対象として浮上してきている。高校再編問題では全日制と同じく，定時制高校の場合も単位制，総合学科が新たな動向の中心になっている。こうした変革の動きは３年間卒業制（３修制）と昼間部定時制高校の拡大となって進んでおり，昼夜間を通した施設運営（多部制定時）の増加を促している。高校教育に一度失敗した青年達に，今一度チャンスを与えるチャレンジスクール（東京都）などと呼ばれる動きも出てきている。そうした新たな定時制高校は確かに人気を高め，倍率も上がっているのだが，定時制高校において入試倍率が高まり，そこから排除される者もいるのだと考えると，こうした動きを単純に評価しているだけではいられない。そこでは定時制高校からも脱落していく生徒達の問題を，学問的にどう考えるかが問われている。

２．研究の目的

本研究は，地域社会の変容と共に定時制高校進学者の質的・量的変容が進行している点に注目し，現代の定時制高校が抱える問題とそれへの対応過程の分析を行い，質的変容の特質を捉え，そこから青年期初期を中心とする現代定時制高校の社会的役割と，生徒達にとって持つ意味を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

(1)戦後の定時制高校の変遷について，学校基本調査，収集資料等から整理する。同時に，各都道府県レベルの高校改革における定時制高校の位置づけについても，収集資料，聞き取り調査等により整理・分析する。

(2)定時制高校生徒，教員を主たる対象とする統計的・質的調査を実施する。

(3)調査結果に基づき，定時制高校生徒の社会的背景と高校生活を実証的に分析し，生徒の諸類型を析出する。同時に，制度的側面，生徒文化，教員文化，若者文化，成人教育，生涯学習等の視角から分析を行う。

４．研究成果

(1)高校改革下の定時制高校の置かれた状況

1990 年代以降特に顕著となった高校改革下での定時制高校の状況について，次のことが明らかになった。

①1990 年代半ば以降，新たなタイプの定時制高校が生まれている。特に大都市部を中心とした昼夜間多部制，単位制，3 修制を軸に形成される定時制高校（後述の「新構想型」）の出現である。これらの定時制高校の中には入学時の生徒数充足率，卒業達成率共に高く，また卒業後の進路で大学・短大，専門・各種学校等への進学者も相対的に高くなっている例もみられる。こうした学校の中には，従来考

えられてきた定時制高校（後述の「伝統型」）の範疇を離れた新たな高校として出現した学校も存在している。

②地方都市部の定時制高校の場合，新たなタイプの定時制高校に入学志願者を集めようとしても，入学志願者の数は限定され，必ずしも定時制高校の意図通りには進まないという事情が大きいと考えられる。従ってそうした定時制高校が抱いている構想は都市部の学校と同様であっても実際には実現し得ないことになる。結果としてこうした高校では新たな構想を多様に取り込むことが学校・教員にとっては大きな負担となっている場合がある。

③上記のような改革を行っていない高校（伝統型）では基本的には従来の姿勢で生徒の指導に取り組んでいる。そのことは指導の持続性と安定性という意味では評価し得る側面を持っている。農村部・漁村部・離島では特にこうした特徴を示す定時制高校が多い。しかしその場合，入学志願者数の減少という事実がこうした定時制高校の整理，縮小，統廃合という圧力として強くのしかかっている。

(2)定時制高校の変遷

戦後高校制度が発足する 1948 年に新たに創設された定時制高校は，1953 年まで入学者数は拡大するが，1965 年までその水準を維持した後は長期間にわたって入学者が減少傾向を示してきた（図１）。それと同時に，定時制高校に入学する生徒層の多様化が進んでいる。多様化が進んだ時期，つまり定時制高校にとっての転換期はおそらく２度あるのではないかと考えられる。１つは，先行研究（前田崇(2009)「戦後復興期から高度成長期の社会変動と定時制高校の社会的機能の変容」『日本学習社会学会年報』第５号など）による地方都市型定時制高校の研究 において，定時制が全日制の受け皿となったという意味で転換期として示されている 1970 年代である。同時にこの時期は 1950 年代から一貫して伸び続けた高校等への進学率が 1974 年度に 90%に達する時期でもある。オイル・ショックから不況に見舞われ，より狭くなった就職先を獲得するためにはより高い学歴をと，受験競争に拍車がかかったとされ，さらに 1968 年から 69 年にかけて改訂された，学習水準を一層高めた学習指導要領によって，落ちこぼれが増加し始めた時期とも重なっている。この時期に前田が指摘するように，定時制高校の転換期があったのではないだろうか。そして，２つめの転換期が上述(1)の高校改革期の 1990 年代である。後者の転換期は制度的な転換期とも言える。

(3)質問調査結果

①地方都市調査

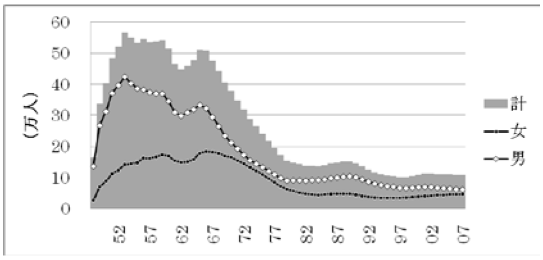

図１ 性別定時制高校生徒数の推移

聞き取り調査等から仮説的に提起された定時制高校の類型を実証的に検証するために，地方都市を対象として，全日制高校・通信制高校との比較を質問紙調査にて行った。調査概要は次の通りである。

期間：2009 年２月
対象：３地方都市の定時制（５校）・通信制（３校）・全日制（４校）の２年生全員・教員
方法：学校への郵送・自記式調査

表１ 学校別性・年齢割合

	女	男	N.A.	16 歳	17 歳	18-	21-	N.A.
全普 A	51	46	3	90	2	1	0	7
全普 B	62	37	1	100	0	0	0	0
全普 C	51	47	2	93	2	1	0	5
全専	2	98	0	92	1	0	0	7
定普 A	71	28	1	88	4	0	0	7
定普 B	45	50	5	64	18	5	4	9
定総 A	60	40	0	73	20	3	0	3
定総 B	67	30	2	89	2	0	0	9
定専	17	67	17	33	0	17	34	17
通信 A	71	29	0	36	31	17	12	5
通信 B	49	46	5	32	27	15	24	2
通信 C	60	35	5	42	17	16	16	9
総計	48	49	2	59	6	3	3	5

全:全日制，定:定時制
普:普通科，専:専門学科，総:総合学科

調査対象校の性・年齢割合を表１に示す。全日制においてはほぼすべてが 16 歳であるのに対し，定時制高校では 17 歳以上の割合が高くなる（通信制はさらに上がる）。

表２ 学校別不登校経験・仕事経験割合

	不登校経験（中学時）			仕事（アルバイト）経験				
	ある	ない	N.A.	いつもしていた	ときどきしていた	あまりしていない	全くしていない	N.A.
全普 A	2	98	0	6	24	3	67	0
全普 B	5	95	0	1	2	2	96	0
全普 C	5	95	0	7	10	5	77	1
全専	3	97	0	9	16	7	68	0
定普 A	46	54	0	41	24	7	25	3
定普 B	34	64	2	48	25	7	18	2
定総 A	43	53	3	23	40	10	27	0
定総 B	12	85	2	58	16	4	20	1
定専	17	83	0	67	17	0	17	0
通信 A	69	31	0	60	19	5	17	0
通信 B	37	63	0	46	22	0	32	0
通信 C	39	59	2	50	25	10	11	3
総計	15	84	1	20	15	5	59	1

表２は高校別に不登校経験（中学時）と仕事（アルバイト）経験の割合を示したものである。16 歳の割合では全日制と変わらなかった定普Ａと定総Ｂであるが，定時制高校は全体的に不登校経験者・仕事経験者が多く（通信制高校の方が多い），定普Ａは不登校経験者が，定総Ｂは仕事経験者が多い。

次に意識類型から定時制の特徴及び定時制類型を確認する。表３はそれぞれ５件法で尋ねた設問を，「あてはまる」＝５点～「あてはまらない」＝１点で換算し，平均得点の高い順に並べたものである。

表３ 教員の生徒認識の平均値

項目	平均値
生徒たちの習熟度の差が大きすぎる	4.35
家庭での悩みを抱えている生徒が多い	4.15
低学力の生徒が多い	4.13
先生と友だちのようにつきあおうとする生徒が多い	3.72
不登校（または経験者）の生徒が比較的多い	3.65
従順で素直だが，幼稚さの残っている生徒が多い	3.44
他人に無関心な生徒が比較的多い	3.23
授業中，私語をする生徒が多い	3.20
生徒たちは学校行事に熱心に取り組んでいる	3.18
他の生徒から浮きあがっている生徒が多い	3.07
校則に違反することがあるが，生活力の旺盛な生徒が多い	2.95
他の生徒とはなじまないが，しっかりとした考えを持っている生徒が多い	2.87
生徒の自傷行為がある	2.85
性的トラブルに巻き込まれている生徒がいる	2.43
いじめが比較的多い	2.16
校内暴力等のトラブルが比較的多い	1.92

表４はこの 16 項目のデータを用いて（１項目は分析中に除外），因子分析を行った結果である。固有値及びスクリープロットから５つの因子を抽出し，それぞれ脱社会・反社会・順社会・学力問題・非社会と命名した。

得られた５因子の因子得点を用いてクラスター分析を行い，５つの問題類型認識を得た（図２）。左から非社会以外の問題をすべて抱える（と認識している）問題混在型。問題が少なく，特に脱・非社会因子が低い仲良し型。反社会因子と学力問題因子が高い荒れ型。脱社会因子・非社会因子の高い無関心型。問題が少なく，生徒同士の関係が希薄な問題少型。以上の５つに類型化された。

学校別にこの５つの類型割合を示したのが図３である。通信制では無関心型との認識が多く，定時制では荒れ型及び問題混在型との認識が多いことが確認できた（定普Ａと通信Ａ，定総Ａと通信Ｂはいずれも同じ学校であり，教員の区別ができていないが，通信Ｃの状況やこれまでの調査から推測して，この２校の無関心型の多くは通信制課程とみなす）。いわゆる教育困難校とも呼ばれる学校は「荒れ型」として３つの定時制高校（定普Ｂ・定専・定総Ａ）が該当し，他の２校（定総Ｂ・定普Ａは「問題混在型」が優勢となっている。一方全日制課程は仲良し型及び問題少型との認識が多くなっている。

表４ 教員の生徒認識の因子分析

因子	脱社会	反社会	順社会	学力問題	非社会
自傷行為	0.869	−0.055	−0.019	−0.132	−0.018
性的	0.790	0.199	0.105	−0.213	−0.102
不登校	0.724	−0.119	−0.132	0.201	0.076
家庭	0.602	−0.049	0.114	0.191	−0.085
いじめ	0.042	0.888	0.033	−0.244	0.121
校内暴力	0.007	0.807	−0.100	−0.016	0.187
私語	−0.103	0.536	0.051	0.313	−0.252
幼稚さ	0.046	−0.066	0.670	0.046	0.091
生活力	0.010	0.074	0.545	0.125	−0.007
しっかり	0.081	−0.072	0.391	0.010	0.229
行事熱心	−0.106	−0.048	0.339	−0.220	−0.185
習熟度差	−0.120	−0.158	0.067	0.604	0.198
低学力	0.264	0.098	−0.007	0.567	0.048
無関心	−0.100	0.178	0.094	0.256	0.646

因子抽出法: 主因子法
回転法: Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

因子相関行列					
脱社会	1	0.0182	0.1206	0.3195	0.2878
反社会	0.0182	1	−0.1054	0.4562	−0.2596
順社会	0.1206	−0.105	1	−0.0544	−0.1179
学力問題	0.3195	0.4562	−0.0544	1	−0.2268

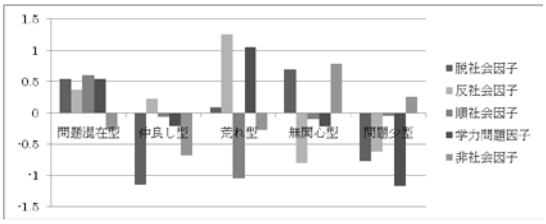

図２ 問題型類型（クラスター分析）

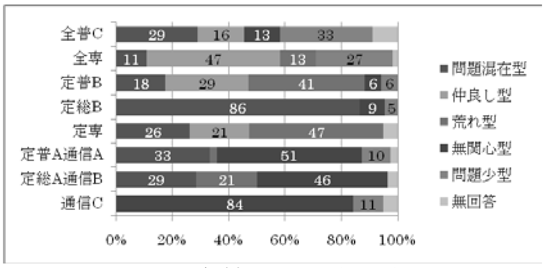

図３ 学校別問題型類型

②全国調査

多様化・複雑化する定時制・通信制高校の状況を全国的に確認するために，すべての定時制・通信制高校を対象とした質問紙調査を行った。調査概要は次の通りである。

調査期間：2009 年 8 月
調査対象：全国の定時制・通信制高校
調査方法：学校への郵送・自記式調査
回収数：定時制高校 370 校（回収率 50.9%）
　　　　通信制高校 69 校（回収率 34.5%）

いわゆる新たなタイプの定時制高校（新構想型）と従来からある定時制高校（伝統型）の違いをみるために，課程編成別に不登校経験者の割合（図４），高等学校退学経験者の割合（図５）を示す。伝統型である夜間１部制の高校では，比較的不登校経験者は少なく，高等学校退学経験者は多い。それとは逆に，新構想型である昼夜間制の高校は，とりわけ昼間部において不登校経験者が多く（80%の学校が 20%以上と答える），高等学校退学経験者は少ない。

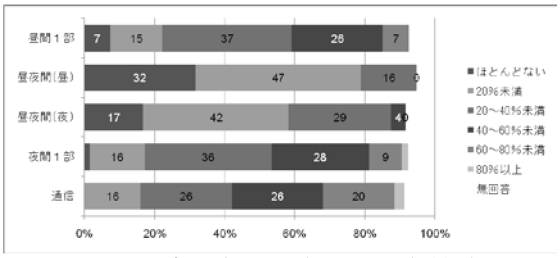

図４ 2009 年度入学生に占める中学校時の不登校経験者割合

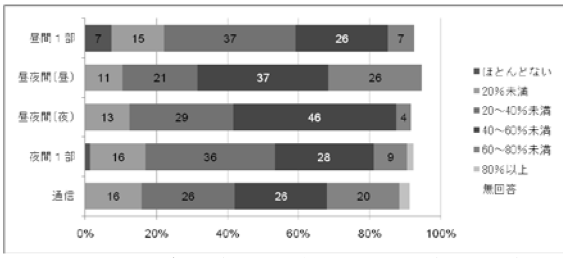

図５ 2009 年度入学生に占める高等学校退学経験者割合

表５は定時制高校の役割について５件法で尋ねた結果を，「強くそう思う」＝５点～「全くそう思わない」＝１点としてその平均値を高い順に並べたものである。通信制高校の結果とともに因子分析を行い，不登校因子・逸脱因子・正当因子の３因子を得た（表６）。この因子得点を用いてクラスター分析を行った結果が図６（左から逸脱志向，不登校志向，伝統志向，現代志向），課程別にクラスターの割合を示したものが図７である。通信で逸脱志向，昼間１部・昼夜間(昼)で現代志向，夜間１部で伝統志向の割合が多くなる。この結果は定時制高校の多様化を示していると言える。

しかしながら多様化の要因は課程編成によるものばかりではない。地域（校区）の高校の配置や歴史的経緯，人口規模や学科，定員など多くの要素が絡み合っている。その規定要因を明らかにすることが今後の分析課題である。

表５ 定時制高校の役割

項目	平均値
経済的に困難を抱えた者への教育機会の拡大に貢献するべきである	4.23
勤労青少年の教育機会の拡大に貢献するべきである	4.08
中学校時代の不登校経験者への教育機会の拡大に貢献するべきである	4.06
低学力者への教育機会の拡大に貢献するべきである	3.77
成人の教育機会の拡大に貢献するべきである	3.74
高校中退者への教育機会の拡大に貢献するべきである	3.48
居場所のない若者に，居場所を提供するべきである	2.91
学校文化になじまない逸脱傾向のある者への教育機会の拡大に貢献するべきである	2.87

表６ 高校の役割認識の因子分析

因子	不登校因子	逸脱因子	正当因子
不登校	0.869	-0.097	-0.008
低学力	0.622	0.074	-0.021
中退者	0.423	0.336	0.041
逸脱	-0.047	0.868	-0.058
居場所	0.038	0.597	0.059
成人	-0.053	0.056	0.788
勤労	0.041	-0.057	0.754
因子相関行列			
1	1	0.59576	0.16957
2	0.59576	1	0.20602
3	0.16957	0.20602	1

因子抽出法: 主因子法
回転法: Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

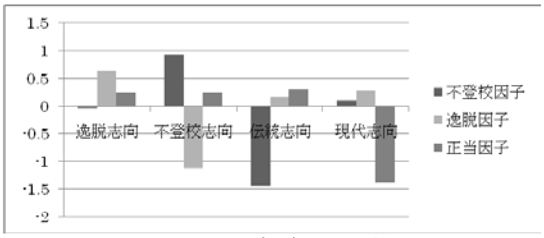

図６役割意識類型

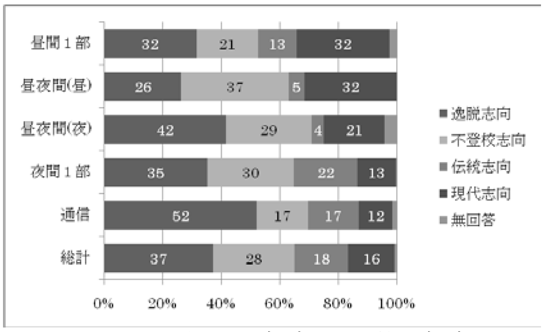

図７ 課程別役割意識類型の割合

(4)総括
調査結果を総括すると，ある定時制高校の役割が見えてくる。それは，制度的に多様化された定時制高校であっても，地方都市では多様化した生徒層を受け入れ（引き受け）ている，ということである。質問紙調査では，いわゆる教育困難校タイプと問題混在校タイプの２つに分化していると見られる定時制高校であるが，多様化した生徒層は生徒類型からどちらのタイプの高校にも存在するという認識が教員にはあることが明かになった。高校のタイプによって，引き受けた生徒類型の強弱（多少）は異なるが，どの類型の生徒も受け入れているというこの点については，聞き取り調査においても同じ認識が確認できる。地方の定時制高校の役割は，その意味では，二重の課題を抱えているとも言える。１つは，定時制高校の制度的多様化に伴う多部制，単位制，３修制等に応じたカリキュラム，教員配置，学校運営など生徒層の多様化に対応した新たなタイプとしての高校改革の実現であり，もう１つは制度的改革への対応の一方で，受け入れることになる生徒層を都市部のようには絞れず（特化できず），多様な生徒層を受け入れざる得ない現実への対応である。
さて，このような役割を果たさねばならない現代の定時制高校の位置を，後期中等教育，あるいは，現代の若者の学校から職業へという移行局面から眺めてみることとする。「卓越化を目指した競争」に対して，「周辺化をめぐる競争」(高口）という側面からみると，現代においては，周辺化をめぐる競争は多様化し，学力競争の周縁だけでなく新しい種類の周縁化競争の境界線に定時制高校は位置していると言えるだろう。一部の定時制高校は従来の周縁に，そして一部は新しい周縁に，そしてどちらにも特化することができない定時制高校は二重の，あるいはさらに複雑な周縁のなかに存在することになるのである。
以上の研究成果は，国内における定時制高校対象の研究のおいても新たな指摘となった。今後も，後期中等教育において周辺化された位置に置かれ，本研究で明らかにした多様化する生徒のたどる進路と高校の役割を追究することが課題として残されている。また，国外との比較研究も望まれる。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①柿内真紀，大谷直史，太田美幸，現代における定時制高校の役割，生涯教育総合センター研究紀要，鳥取大学生涯教育総合センター，第６号(2009)，2010，1-25
②高口明久，柿内真紀，大谷直史，太田美幸，高校教育改革下の定時制高校の状況～全国定時制高校調査の結果から～，地域学論集，鳥取大学地域学部紀要，査読無，４巻３号，2008，327-367，http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/Repository/metadata/58

〔学会発表〕（計２件）
①大谷直史(共同研究発表代表)，柿内真紀，太田美幸，現代における定時制高校の役割～定時制高校の分化と生徒類型～，日本教育社会学会，2009 年 9 月 12 日，早稲田大学教育学部
②高口明久，柿内真紀，大谷直史，太田美幸(共同研究発表代表)，定時制高校の史的展開と分化に関する研究，日本教育社会学会，2008 年 9 月 20 日，上越教育大学

〔その他〕
①「全国高等学校定時制・通信制課程調査 2009 報告書(概要版)」，鳥取大学定時制高校研究グループ，2010 年 2 月発行，(調査対象校へ配布)

６．研究組織
(1)研究代表者
高口　明久（TAKAGUCHI AKIHISA）
鳥取大学・地域学部・教授
研究者番号：50127453

柿内　真紀（KAKIUCHI MAKI）
鳥取大学・生涯教育総合センター・准教授
研究者番号：70324994

(2)研究分担者
大谷　直史（OOTANI TADASI）
鳥取大学・生涯教育総合センター・准教授
研究者番号：50346334

太田　美幸（OHTA MIYUKI）
鳥取大学・生涯教育総合センター・講師
研究者番号：20452542

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：